映像アーカイブ活用と新たな展開2018
大学・図書館と放送ライブラリーの取組の報告

記録

2018 年 11 月 17 日（土）

目次

Ⅰ. 開催概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

Ⅱ. 登壇者プロフィール・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

Ⅲ. 成果報告

①長崎県立大学国際社会学部　村上雅通　教授・・・・・・・・・3

②三重短期大学生活科学科　武田誠一　准教授・・・・・・・・・5

③上智大学文学部　柴野京子　准教授・・・・・・・・・・・・・・6

④諫早市立諫早図書館　相良裕　館長・・・・・・・・・・・・・・7

Ⅳ. パネルディスカッション

「アーカイブ番組の利用促進に向けて」・・・・・・・・・・・・・8

Ⅴ. セミナー参加者からの意見・質疑応答・・・・・・・・・・・１０

Ⅰ．開催概要

映像アーカイブ活用と新たな展開 2018
大学・図書館と放送ライブラリーの取組の報告

放送ライブラリーの公開番組を大学の授業や公共施設で活用するサービスを利用した大学教員、図書館員を招き、事例報告とパネルディスカッションを行った。

■日時　2018 年 11 月 17 日（土）14:00～17:00

■会場　上智大学　四谷キャンパス　６号館 307 教室

第１部（14:00～15:35）
- 開会挨拶　音　好宏（上智大学 教授）
- 番組利活用事業の説明　鈴木　貴尚（放送番組センター 副主幹）
- 事例報告
  - ① 村上 雅通（長崎県立大学 教授）
  - ② 武田 誠一（三重短期大学 准教授）
  - ③ 柴野 京子（上智大学 准教授）
  - ④ 相良　裕（諫早市立諫早図書館 館長）

第２部（15:50～17:00）
- パネルディスカッション
  - ① パネラー　村上 雅通（長崎県立大学 教授）
  - ②　〃　武田 誠一（三重短期大学 准教授）
  - ③　〃　柴野 京子（上智大学 准教授）
  - ④　〃　相良　裕（諫早市立諫早図書館 館長）
  - ⑤ 進行役　音　好宏（上智大学 教授）
- 質疑応答

■主催　公益財団法人 放送番組センター
上智大学メディア・ジャーナリズム研究所

Ⅱ．登壇者プロフィール

	村上 雅通（むらかみ まさみち） 長崎県立大学 国際社会学部 教授 所属学会等 元熊本放送プロデューサー、放送人の会理事
	武田 誠一（たけだ のぶかず） 三重短期大学 生活科学科 准教授 所属学会等 日本社会福祉学会、日本保健福祉学会、日本プライマリ・ケア連合学会、社会政策学会、日本医療・病院管理学会 ほか
	柴野 京子（しばの きょうこ） 上智大学 文学部 新聞学科 准教授 所属学会等 日本社会学会、日本出版学会、日本マス・コミュニケーション学会、メディア史研究会、デジタルアーカイブ学会
	相良 裕（さがら ゆたか） 諫早市立諫早図書館 館長
	音 好宏（おと よしひろ） 上智大学 文学部 新聞学科 教授 所属学会等 社会情報学会、放送批評懇談会、日本平和学会、日本社会学会、情報通信学会、日本マス・コミュニケーション学会

Ⅲ. 成果報告①

長崎県立大学
国際社会学部

村上 雅通 教授

■番組を利用した授業

国際情報学部 情報メディア学科 『映像研究』(2013～17 年度)、『演習Ⅱ』(2017 年度)

国際社会学部 国際社会学科 『映像ジャーナリズム論』(2018 年度)

■利用した番組

タイトル	放送局	ジャンル	放送日
四季 ユートピアノ	NHK	ドラマ	1980.01.12
RCCスペシャル 原爆プレスコード	中国放送	ドキュメンタリー	1980.08.26
「第九」を歌った町 ―北海道・清水町―	北海道放送	ドキュメンタリー	1980.12.12
マリコ〔1〕〔2〕	NHK	ドラマ	1981.08.15
アンダルシアの虹 ～川(リバー)スペイン篇～	NHK	ドラマ	1983.03.19
HBCスペシャル 大草原の少女 みゆきちゃん	北海道放送	ドキュメンタリー	1986.06.15
祖国へのはるかな旅 ある中国残留婦人の帰国	山口放送	ドキュメンタリー	1987.06.26
童は見たり 世界最大のヒット曲「野ばら」の謎を追う	北海道放送	ドキュメンタリー	1987.12.31
封印 ～脱走者たちの終戦～	熊本放送	ドキュメンタリー	1996.11.28
流転 南米へ渡った民の記録	石川テレビ放送	ドキュメンタリー	1996.11.30
市民たちの水俣病	熊本放送	ドキュメンタリー	1997.05.31
NNNドキュメント'98 クラウディアからの手紙	日本海 テレビジョン放送	ドキュメンタリー	1998.11.17
記者たちの水俣病 ／ 第14回民教協スペシャル	熊本放送	ドキュメンタリー	2000.02.11
NNNドキュメント'03 チンチン電車と女学生 2003・夏・ヒロシマ	広島テレビ放送	ドキュメンタリー	2003.09.01
少年たちは戦場へ送られた ／ 第24回民教協スペシャル	信越放送	ドキュメンタリー	2010.02.11
SBCスペシャル 確証 ～初証言・松本サリン事件20年～	信越放送	ドキュメンタリー	2014.07.02

■利用形式

講義中の上映、予習・復習用の個別視聴

■報告要旨

(1)利用に至るまで

映像の制作者は、先輩たちが作った映像を見て勉強してきた。見て勉強することで良い事例を吸収でき、その反対に、やらないほうがいい反面教師の例もあった。そういった経験を踏まえ、学生にはできるだけ映像に接する機会を作ってほしいといった思惑があった。

(2)利用方法

授業では、一つの番組に対して２コマ使っていた。１コマ目では番組の解説をする。番組ができた背景、社会背景や時代背景を解説してモニターさせる。２コマ目では番組を見た感想を学生たちでやりとりさせた後に、私が分析をしていく。作りや編集方法、映像表現を解説して、その部分を改めて見て、学生たちと討論をした。

私はドキュメンタリーをずっと作ってきたが、１時間のドキュメンタリーを作るのに 30 分テープを 150 本ぐらい回す。つまり、番組に出てくるのは撮影した映像の 100 分の１しかない。それだけ凝縮しているものをさらに分割して部分を切り取って見せることは、映像制作者としては本当に耐えがたいことで、ぜひ全部見せたい。映像には表情、言葉の語気、間合いなど、活字には表現できない情報が散りばめられている。しかも、それらの情報は物語の重要な伏線になる場合がある。一部を視聴して解説をする手法で講義したこともあったが、やはり物足りなさが残った。後に学生たちが授業前に番組を見られるようにしてもらい、事前の視聴によって映像に特化した解説が可能となった。学生が全体像を掴んでいる状態で授業に臨み、部分的、全体的な解説も含めて、２コマで授業をした。この２コマ、あるいは２コマ半ぐらいで授業したが、それでも全てを解説することはできなかった。

(3)効果

学生に番組を事前視聴しておいてもらい、講義では部分的に使用する授業にしたところ、社会への伝わり方や、官製報道依存、メディアスクラム、知識不足、商業ジャーナリズムなどといった弊害や課題が学生たちに伝わった。放送番組を利用した授業がこのような効果を生み出したと思っている。

Ⅲ. 成果報告②

三重短期大学
生活科学科

武田 誠一 准教授

（愛知大学 地域政策学部 講師
皇學館大学 現代日本社会学部 講師）

■番組を利用した授業

生活科学科 生活科学専攻『社会福祉援助技術論Ⅰ』(2017 年度)、『医療福祉論』(2018 年度)

（愛知大学地域政策学部 地域政策学科『社会福祉政策論』(2018 年度)
皇學館大学現代日本社会学部 現代日本社会学科『公的扶助論』(2018 年度)）

■利用した番組

タイトル	放送局	ジャンル	放送日
スペシャルドラマ 心中津軽十三湖	CBCテレビ	ドキュメンタリー	1999.09.11
どさんこドキュメント 命の値段 がん患者、闘いの家計簿	札幌テレビ放送	ドキュメンタリー	2009.05.30

■利用形式

講義中の上映

■報告要旨

(1)これまでの授業における課題

大きな授業の組み立てとして、ソーシャルワーク（社会福祉援助技術）という理論があることを教え、理論と同時に、応用した事例や活用の方法を取り上げている。高齢者、障害者、母子家庭などの生活に課題を抱えている人の背景を読み取りながら、どういう関わり方をすべきかを考えていく授業の展開をしているが、テキストの資料だけではそういった方たちの生活を具体的にイメージし辛いことが課題であった。

(2)番組を利用した理由

日ごろからイメージをどうやって伝えていくか考えており、映像教材も使うことを考えていた。認知症患者とその家族がテーマのドラマ『心中津軽十三湖』を見たことがあり、教材として最適だと思って探していたところ、放送ライブラリーのアーカイブを利用できることを知った。このドラマは、認知症患者の若い時の出来事、家族との関係、生い立ちなどが描かれており、高齢者が置かれている生活状況を理解するのに適した教材であった。その他にも利用した『命の値段 がん患者、闘いの家計簿』は、授業で取り上げたかった内容が書籍化されているため、書籍でゆっくり振り返ることもできたが、映像で見ることのインパクトを優先した。人の表情を見て、声を聴きながら背景や状態を理解してもらいたかった。

(3)課題と提言

授業での利用を申し込む前に番組をじっくり確認できない点が課題である。今回使った番組は見たことがあり、記憶に残っていたので探すことができた、事前に映像を確認できる仕組みがあったほうがいい。また、一緒に授業を担当する他の教員と様々なテーマの番組を共有して使えるようになり、利用申請も省略できる仕組みになればいいと思う。

Ⅲ. 成果報告③

上智大学
文学部

柴野 京子 准教授

■番組を利用した授業

文学部 新聞学科『デジタルアーカイブ論』(2016～2018 年度)

■利用した番組

シリーズ名	放送局	ジャンル	放送日
人類・その明日 資源問題への挑戦	毎日放送	ドキュメンタリー	1975.01.05～
名作のふるさと 第1・2・4集	テレビ神奈川	教育・教養	1973.01.11～
新・名作のふるさと 第1・2集	テレビ東京	教育・教養	1982.02.21～
地球時代	テレビ東京	ドキュメンタリー	1977.01.17～
未来はそこにある	フジテレビジョン	ドキュメンタリー	1974.03.03～

■利用形式

メタ・データ作成のための視聴

■報告要旨

(1)授業の構成と内容

『デジタルアーカイブ論』は２年次以上の専門科目で、定員は 20 名である。授業にはパソコン教室を使用し、３部構成とした。

第１部アーカイブ資料を読む、では歴史的な画像や映像が含まれる動画を用いて、意識的・能動的に映像を読み解くスキルを身に着けることを目的とした。動画で使用されていた映像・画像の出典元はどこか、場所はどこか、同じような画像がないか、などをインターネットで調査させ、その過程でアーカイブに触れることで、組織アーカイブの存在も意識させる仕掛けにした。

第２部デジタルアーカイブを使ったプレゼンテーションを作る、では自由なテーマでネット上にあるものや大学が契約しているデータベース、図書などを使用して 10 分以内のプレゼンテーションを作成した。

第３部が放送ライブラリーで未公開となっていた 1970 年前後に放送されたドキュメンタリー番組を利用した実習である。グループで番組を視聴し、メタ・データを作成した。作成したメタ・データは放送ライブラリーで使用してもらっている。従って、サービスラーニングのような形になっている。

(2)効果、学生の感想

授業の効果として、まずは放送番組の理解がある。台本と映像を照合しながらシーン表を作成したり、著作権者をピックアップする作業などを通じて、番組に含まれる情報の多様性や構成の複雑さを理解した

さらに、アーカイブの制作や意義への理解がある。権利関係が非常に複雑な中でデータを残していくことや、体系的にアーカイブすることについて、実際にアーカイブを利用し、作成することで、目的をもって体系的に保存されている資料と、インターネット上で見つかる資料がどう違うのかを理解したという感想が多く寄せられた。

そして、アーカイブを探すのにもリテラシーが必要である、ということへの理解だ。どのようなキーワードで検索すれば目的の資料を探し出してもらえるようになるかは、アーカイブを提供する側にもよる。反転的な授業として、自分たちが作成し、実際に難しさを体験することで、その情報に行き当たりたい人のために、どんなメタ・データを提供すべきか意識するようになった。

Ⅲ. 成果報告④

諫早市立諫早図書館

相良 裕 館長

■視聴ブース設置場所

諫早市立諫早図書館・ふるさとの文人コーナー（2016.11 開始）

■利用中の番組

タイトル	放送局	ジャンル	放送日
木曜劇場 親戚たち 〔1〕～〔13・終〕	フジテレビジョン	ドラマ	1985.07.04～09.26
明日 1945年8月8日・長崎	日本テレビ	ドラマ	1988.08.09
スペシャルドラマ 幽婚	CBCテレビ	ドラマ	1998.10.25
東芝日曜劇場 サハリンの薔薇	北海道放送	ドラマ	1991.11.24

■利用形式

一般来館者による個別視聴

■報告要旨

(1)脚本家 市川森一さん

諫早市出身で、諫早図書館の名誉館長もしていただいた脚本家の市川森一さん（1941－2011 年）の上映展示会（2013 年）がきっかけとなり、放送ライブラリーと深く付き合うこととなった。

図書館にはシナリオルームという部屋があり、市川さんの資料、シナリオ、原稿等を所蔵している。市川さんが、諫早にお帰りになったときには、実際にこの部屋で執筆された。現在も亡くなったときのままの状態に保存しており、来館者に公開している。

(2)番組の視聴実績

諫早図書館では視聴覚資料が約１万１千点あり、それらの視聴回転率は 0.25 回で、放送ライブラリーの番組は 39.2 回と格段に視聴回数が多い。特に諫早を舞台にしたドラマ『親戚たち』は、俳優の役所広司さんの出世作でもあり、エキストラ出演した市民も多く、諫早に非常になじみがあり、利用が多い。このような地域性のあるコンテンツは、圧倒的に市民の興味の対象となっていると感じる。また、原爆投下前日を描いた『明日 1945 年８月８日・長崎』については、もっとＰＲして多くの人に見てもらったらどうか、という声も利用者からいただいている。

(3)図書館の取り組みと放送番組の利用

多くの図書館がミニ企画をたくさん実施しており、諫早図書館でもやっているが、映像資料と企画展示とを合わせた形で提供できるかもしれないと思った。図書館では資料を細かく分類しているので、ありとあらゆる映像資料に本がマッチするはずである。30 万冊ぐらいあれば、一つの映像作品とその図書資料とを組み合わせることが十分できる。ただ、放送ライブラリーの番組利用申し込み前に、視聴して内容を確認できない点と、どこまで著作権をクリアできるのか分からない点が課題である。図書でいえば青空文庫のように映像資料を提供する仕組みができないものかという意見も、職員の中から出ている。

今後、たくさんの資料と放送番組を結びつけた提供をしていきたい。図書館は来館者に本を利用していただく機関なので、どうすれば利用者が自分からそこに行って本を手にとるか、視聴覚資料を視聴しに行こうという気持ちになれるかを、今後も学ばなければいけないと思っている。

Ⅳ. パネルディスカッション

「アーカイブ番組の利用促進に向けて」

パネリスト

村上 雅通（長崎県立大学 教授）

武田 誠一（三重短期大学 准教授）

柴野 京子（上智大学 准教授）

相良　 裕（諫早市立諫早図書館 館長）

司会

音　 好宏（上智大学 教授）

■発言要旨

アーカイブされている番組を授業に取り入れることについて

村上：映像は理屈も大切だが、見て学ぶことが必要だ。熱心に勉強してテレビ局に入社した学生は授業に一生懸命取り組んでいた。負担を感じる学生も一部いたが、授業前に視聴してから授業に臨むようにすることで、作品の構成や時代背景、制作意図などを解説することに加え、シーンごとに映像の持つ意味などの議論を深めることが出来た。

武田：視聴後に学生にディスカッションさせると、単に講義を聞いた時より深く考えていると感じる。政策や理論を理解するだけでなく、社会福祉には必ずそこに「人」がいることを、映像を通して実感してほしい。

音　：柴野先生は授業の中で、既存のアーカイブやネット上の情報を利用したテーマ研究も組み込んでいて、バブル時代や、大阪万博などのテーマ研究では、学生たちから社会に対しての気づきがあった。放送番組センターのアーカイブに触れ、もう片方で全く違う国のアーカイブに触れることで、国家的な視点の違いに触れてしまう。国境を越えてアーカイブに触れることは、教員にとっては何が起こるかわからない部分がある気がしますが。

柴野：学生は授業のたびに毎回違う情報を見つけてきたり、発見があったり、インターネット上では昨日は無かったもの

が今日はあったり、その瞬間々々にどういうものが構成されているかを全員で体験できたことは思わぬ収穫だった。学生たちは一つのインターネットのプラットフォームの中でフラットに情報を見ていて、それがどういう情報であるかを後から発掘していく。紙ベースの情報をとりあえずデジタル化した、という世代との間で何が起こるかが、これからの教育、あるいはアーキビストがどういう存在として成長していくか、のヒントになる気がする。

図書館の取り組みについて

相良：図書館はいろんなことにチャレンジしようとしている。一定の方だけのサービスに留まらず、例えば、市川さんの作品をご覧になった方にカウンターで、こういった本は面白かったですよ、という一言で繋いでいく。これは大事なことだと思っている。市川さんは諫早の文化を、詩人の伊東静雄、小説家の野呂邦暢、そして自分へと引き継いできた、と仰っている。これまでの文化をどういう形で次に渡すことができるか。公的な機関がそのような役割を担わないと途切れてしまう。繋がれてきたものが途絶えてしまう怖さ、危険性もあることを頭に入れておきたい。
　図書館は今変わろうとしている。多機能化が求められてきている。品川区立大崎図書館では、リハビリテーション病院と図書館が一緒になった。公共施設をお役所が作り、使いづらい、制度も使いづらい、ということはよくある話だが、使う側の市民が計画に参加することが必要だ。諫早図書館の活動でも、市民が自分たちで動きやすくなる形を作る動きが出てきていて、そこからまた次に繋がっていくだろう。今は、図書館がそういう動きをする流れだと思っている。

村上：長崎県のある町に映像アーカイブを提案したが、著作権や肖像権などの権利関係や、管理の手間についての声が出た。また、県が新しい図書館を作る際に、県内の放送局の映像や、写真家の人たちが持っている写真もアーカイブしたらどうかと提案し、陳情や署名活動をしたが、未だに検討中だ。こちらも権利関係や保存の難しさなどがネックだということであった。

音　：放送番組センターをハブにして、公共施設としての図書館と、大学のような研究機関が繋がっていく話だと思う。機能するアーカイブがあれば、公共スペースが文化的にも、領域も広がっていくと思った。

映像アーカイブに望むこと

村上：各地域にも様々なアーカイブがあるが、それらが複合しながら連動していく、そういったアーカイブができればいいと思う。活字では決して表現できない映像の特性があるが、アーカイブを利用しながら取り入れ、広がっていけば、さらに映像の世界は広まっていくのではないかと思う。

武田：授業に役立つ番組をどうやって見付けるかが最大のネックで、横浜に来て探さなければ映像が見られないのは遠方の教員には負担が大きい。柴野先生が授業で作られたシーン表のように詳細な番組内容が記載されていると、視聴したことのない番組でも内容が想像しやすくなる。また、研究者が授業で使う場合には、ある程度の制限を設けて、申し込み前に見られるようにしてほしい。最もいいのは番組のタグづけがきちんと出来ていて、希望する内容が簡便に検索できることだ。

柴野：放送番組センターがすぐ着手できそうなこととしては、テーマ別の番組リストの作成、あるいは実績を積み重ねていく中で、これまで利用した先生が何の番組を使ったかというノウハウの蓄積から大学の教育で使えるプラットフォームを作ることが現実的だと思う。

相良：皆さんと同意見で、こういう番組をこういった使い方で、ということも含めて提供してほしいと思う。また、図書館が番組に取り上げられることは少ないが、『ドキュメント 72 時間』(NHK) で移動図書館車が取り上げられて放送された。さらに『美の壺』(NHK) でも図書館が取り上げられ、図書館関係者の間では、番組のことで議論があったりもした。図書館員同士でそういった議論をすることは大変少ない。映像を介して図書館員同士、あるいは大学図書館や研究者を含め、共有しながら繋がることで何かが見えてくると思い、大いに期待している。

Ⅴ．セミナー参加者からの意見、質疑応答

○映像は人の情感に訴えるところがある。授業での効果も含め、非常に強い影響力があると思う。他方でそれがテキスト化されないため、なかなか検索されない、学生の卒業論文にもしにくい、というような問題がまだまだある。アーカイブづくりによって、より学問的に使えるものにしていけないかと強く感じている。（大学教授 元テレビ番組制作者）

○ドキュメンタリーをもう少し賢く使い、普及させることで、ドキュメンタリーの持つパワーを含めて映像アーカイブを活用していくシステムづくりが必要だ。ドキュメンタリーでは傑作、名作というのはあまり聞かないので、発掘していくことを未来に伝えるメッセージとしてやらなければならないと思う。（元 テレビ番組制作者）

○［質問］映像は時折、都合の良いように露出される。ある出来事の同じ映像が頻繁に放送され、その映像だけが記憶に残り、出来事のイメージや、歴史に対する意識がかなり変わってしまうと思うが、どのように考えているか。（学生）

○［回答］

村上：アーカイブを作るとき、何を集めるかという基準もあると思う。放送ライブラリーの場合には受賞作品が多い。実際にコンクールの審査をやっていると、受賞作品よりも良い作品はたくさんあると思うことがある。それらをどう拾い集めていくか、ということも、これからのアーカイブに必要だと思う。私は、放送ライブラリーで受賞作品でない番組を選考する担当をしているが、今後は受賞作だけでなく、選から漏れた作品にも目を配る必要がある。

音　：二点ある。一つは、特にナショナルなアーカイブは、その国の価値観が、どうしても少なからず見えてしまう。米議会図書館のアメリカン・メモリーのように、国立のアーカイブにはある種の政治性はつきもの。何を残していくかが非常に重要である一方で、インターネットで簡単に国境を越えられる現在、アーカイブのネットワーク化は意義がある。

　二つ目は、ＢＢＣやＣＮＮの有名プロデューサーから、日本のドキュメンタリストのドキュメンタリー文脈がワールドマーケットの中で通用しない、と言われる。英語圏ではドキュメンタリーの読み解きが一定程度共通しているところがあるが、日本はアーカイブが弱いために、過去のドキュメンタリーにアクセスできる場が多くない。そういった点でも、ワールドマーケットの中でマテリアルガラパゴス化しないように、日本もアーカイブをより活性化させることに意味がある、と感じている。

【セミナー当日の様子】